

いちのせき

広報

平成20年 11.15 No.76

主な内容

- すくすく子育て P 2~4
- 保育園入園受け付け P 5
- 暮らしの情報 P 8~11

なまりも声のかすれも「個性」
 聴く人の顔を思い浮かべ
 記事を選んで録音します



視覚障害者に地域の情報を届ける「声の新聞」代表

加藤加代子さん

主婦業の傍ら「声の新聞」の朗読を続けて24年。ピアノ、旅、水泳などボランティア以外の趣味も生き生きとこなす。萩荘、64歳



先ごろ、27年間にわたる活動を振り返る記念誌を発行した「声の新聞」。現会員、元会員14人が視覚障害者のために地元新聞の記事をテープに録音し、提供してきた思い出をつづりました。代表の加藤加代子さんは活動を始めて24年。「一人での録音作業は、孤独だけれど自分の時間を好きに使うことができるのがいいところ。発声、なまりなど朗読の技術に自信はないのですが、何でも『個性』ととらえて、頑張り過ぎないことが長続きの秘訣」と振り返ります。

「何の記事を選ぶかも担当者の個性」と加藤さん。新聞1週間分を1時間のテープにまとめます。「A面はニュース、B面には健康欄、投稿欄、慶弔欄などニュース以外から。例えば、忘年会シーズンには飲み屋さんの広告を読むことで季節感を出します」と語ります。

朗読テープを利用する視覚障害者の皆さんのグループ旅行に同行したことも。「旅を心から楽しむとともに、料理、縫い物、音楽など、多彩な趣味に生き生きと取り組む姿に驚き、そして学びました」。録音時には利用者を思い浮かべ、体調に気を付けて明るい口調を心がけます。

「新しい仲間がほしい」と加藤さん。「20〜30代の若い人たちが退職した男性など、ボランティアに興味のある人たちはいるはず。時間に縛られない朗読は気軽なボランティア」と語りました。